

小論文

●社会環境学部 (社会環境学科)

学校推薦型選抜
(専願制)
(併願制)

(解答：62ページ)

この科目には解説動画があります。



次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

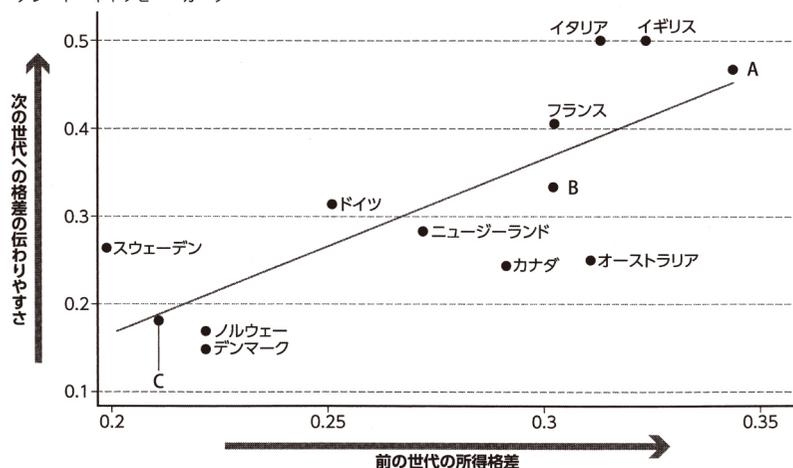
(設問の都合上、本文の一部を省略・改変した。)

日本は格差社会に入っており、それが世代間でどう継承されているかに関心を向ける。つまり親の世代の所得が高(低)ければ、子どもの世代の所得も高(低)いのか、である。逆の可能性を考えれば、親の世代の所得が低(高)くとも、子どもの世代の所得が高(低)くなることはあるのか、といった問題設定である。

この問題を分析する手段として、アメリカの経済学者、アラン・クルーガーなどによる「グレート・ギャツビー・カーブ」が有効である。この名称は、作家のスコット・フィッツジェラルドによる小説「グレート・ギャツビー」から借用したものである。この作品はアメリカ上流階級の子弟の生活を描いており、いわば親子間の生活継承を語っているため、世代間の継承を物語るのにふさわしい言葉なのである。

図1はこのカーブをCorak, "Income Inequality, Equality of Opportunity, and Intergenerational Mobility [出題者注：「所得格差、機会平等及び世代間移動」]"から引用したものである。横軸に親の世代の所得格差(ジニ係数)をとり、縦軸には子どもの世代の所得格差に継承される程度(β係数と呼ぶ)をとって、相関度を示したものである。βの値が高いほど親が貧乏すれば子どもも貧乏になり、逆に低いほどたとえ親が貧乏くとも子どもも豊かになれる可能性のあることを示している。OECD(経済協力開発機構)諸国における各国の相関度がこの図でわかる。

図1 グレート・ギャツビー・カーブ



注：縦軸がβ、横軸はジニ係数
出所：Corak(2013)

このカーブの右上に集まっている国々、アメリカ、イギリス、イタリアなどでは相関度が高いので、親の経済状況が子どもに継承される確率が高い。すなわち、親が豊かであれば(貧乏しなければ)子どもも同じように豊かに(貧乏に)なるのである。しかもこれらの国は、多くが親の世代の貧富の格差が大きい国でもあるので、格差の大きい国ほど継承の程度が強い、と言えようである。

一方のカーブの左下にある国々、ノルウェー、フィンランド、デンマークといった北欧諸国はその逆で、親の世代の所得格差が小さいうえに、親子間で貧富の状況が継承される確率は低い。親の世代の所得格差も子どもの世代のそれも、ともに小さいのである。関心の持たれるのは日本の位置である。まず日本はアメリカ、イギリス、イタリアの位置に近い。これらの国ほど極端ではないが、親の世代の所得格差は大きい方だし、βの値も平均より少し大きいので、親の所得格差がアメリカなどほどではないが、子どもの格差に継承される程度はやや強いのである。

このことの意味をまとめておこう。第1に日本は格差社会に入っており、貧富の格差がかなりある、ということである。しかも親の世代ですでに顕著と認識できる。

第2に親子間でかなりの程度の相関がある。すなわち親が豊かであれば子どもがそうなる確率はかなり高く、逆に親が貧乏であ

れば子どもも貧乏になる可能性が高い。しかしその逆転がまったくないかといえば、北欧諸国ほどではないが、多少その道は残されている。子どもが親の職を継承せずに、まったく異なる職業、例えば親が農家であっても、子どもが新しい企業を起こして成功する経営者になったり、開業医などに就けばあろう。

ではなぜ日本では親子間の貧富の状態の継承関係がかなり高いのであろうか。その理由はいくつかある。

第1に、親子間で職業の継承される可能性が高いことがある。これは世襲という現象である。第2に教育も親子間で継承される程度が高い。親の教育水準が高い(低い)のであれば、子どもの教育水準も高い(低い)可能性が高い。日本は教育費支出を家庭に依存しており、国は多くを支出していない。国家が教育費支出を多くしている国では、貧乏な子どもでも高い教育を受けることができるのである。第3に、結婚相手の二極化(パワーカップルとウィークカップル)現象がからんでいる。すなわち、結婚によって親の経済状況が子ども夫婦に継承される確率を否定できない。

江戸時代から戦前にかけて日本では、子は親の職業を引き継ぐのが慣習であった。江戸時代では、武士の子は武士という世襲であり、農家も大半が世襲であったが、商人などを含めれば、親子間で職業の異なることが多少あった。そして戦前と戦後のしばらくの日本は基本的に農業国家で、農家は世襲が多かったため、世襲国家とみなせた。

戦後の高度成長期に入ると、地方における農家育ちの子ども(特に次男・三男)が都会に出てきて被雇用者となるケースが増加し、ブルーカラーやホワイトカラー職業になることによって、世襲率は低下した。そのことを数字で確認しておこう。

表1は、1955年(昭和30)年から2005年(平成17)年までの50年間にわたって、男の子が父親の職業と同じ職業に就いた比率(世襲率と称する)を示している。1955年では世襲率は43%の高さであったが、その後徐々に低下して1995年には7%にまで低下した。世襲は減少し、開放社会になったのである。社会学ではこれを社会移動の激しい国と定義する。

表1 世襲率の経年的変化

年	SSM ¹ /JGSS ²
1955	43%
1965	24%
1975	18%
1985	12%
1995	7%
2005	10%
2000～2010	10%

(出所) 橋本俊詔・参鍋篤司『世襲格差社会』中公新書、2016年。

¹SSM：「社会階層と社会移動調査」。日本の社会学者グループによる調査。男子が父親と同じ職業に就いた割合。

²JGSS：「日本版総合的社会調査」。大阪商業大学による調査。2000～2010年のみ。

もう少し細かい職業分類によって、日本の世襲率を見ておこう。表2は、職業分類を25に拡大して、世襲率と年間収入を示したものである。ここでは世襲率を2つの定義で計測している。世襲率Ⅰとは、父親の職業がどれほど子どもに引き継がれたかを示し、世襲率Ⅱとは、職業別に子どもが親の職業を引き継いだ率である。世襲率Ⅰは親を基準にした(あるいは親から子を見た)定義であり、世襲率Ⅱは子どもを基準にした(あるいは子どもから親を見た)定義とみなしてよい。なお年間収入は子どもの収入である。

表2 職業分類別世襲率及び平均所得

	世襲率Ⅰ (%)	世襲率Ⅱ (%)	年間収入 (万円)
歯科医師	42	53	1147
医師	39	36	1317
【D】	38	59	377
和のものづくり	29	20	391
一般事務	23	18	563
機関運転・労務作業	21	17	383
サービス	20	12	302
機械組立・修理・製造	19	14	456
販売員	18	9	512
【E】	16	94	372
飲食店	16	11	397
【F】	16	4	608
医療関係	14	6	485
研究者	13	9	759
【G】	12	34	536
経営者	11	9	1147
ガラス・金属・セラミック	11	19	455
繊維・紙・木材	10	21	373
教員	10	8	541
運輸・通信	10	9	392
文芸・アート・芸能	9	5	566
法律・会計・税	9	4	946
その他生産従事者	8	6	433
保安公務	8	6	482
管理的公職	3	4	806

(出所) 橋本俊詔・参鍋篤司『世襲格差社会』中公新書、2016年。

この表はさまざまな興味ある情報を提供している。第1に、世襲率の特に高い職業は歯科医師と医師である。これは世襲率ⅠとⅡで共通である。しかも年収も双方とも1000万円を超えている。医師の年収の高いことが世襲を高めている理由の一つである。

なぜ医師・歯科医師の世襲率が高いのだろうか。第1に、開業医であれば親の診療施設と患者を共有できる。第2に、皆から尊敬される職業であるし、やりがいのある仕事である。第3に、高い教育を受けねばならず、教育に関心のある親子にとってはうってつけであるし、親の高収入はそれを可能にする。

世襲率の高い第3位が宗教家（僧侶や神主）であることも驚きではないが、年収が377万円とそう高くないのが医師との違いである。世襲の理由は医師と似た点がある。第2に、もっとも興味深い職業は農林水産業である。世襲率Ⅰではそれほど高くないが、世襲率Ⅱは特に高い。親が農家であっても子どもは他の職業に就く確率がとても高く、子どもが農家になるときは親も農家なのである。これは親は農家でありながら子どもは農業を継承していないが、子どもが農業に従事している場合には、その親も農家であった確率がとても高いことを示している（農業への新規参入が少ない事情もありえよう）。日本の社会の親子間の職業継承を如実に示している価値ある事実であるし、世襲率の定義を二区分した意義が、農業を分析したことによって現れている。

第3に、もう一つの興味ある職業は、小売・卸売店主である。世襲率Ⅰは低いが、世襲率Ⅱは歯科医師ほどではないがかなり高い。これは農家の場合と似たところがあり、親は子どもに引き継がせていないが、子どもが引き継いだ場合には、その親も小売・卸売店主であるケースがかなりあるということになる。

第4に、世襲率ⅠとⅡがともに少しだけ高い（すなわち10%後半から20%台）というのは、一般事務、機関運転・労務作業といった多くの人の従事する職業で、ごく普通水準の技能を必要とするので、そこそこの世襲率の高さとなっている。

第5に、年収の高い職業で世襲率Ⅱが非常に低い職業は、エンジニア、研究者、法律・会計・税といった専門職であり、子どもの高い教育と技能が必要なので、親の職業とはさほど関係なく、子どもの教育が高ければこのような職に就くことが可能なのである。（橋本俊詔『日本の構造—50の統計データで読む国のかたち』講談社、2021年）

【問題】 次の問1から問4に答えなさい。

問1 【A】から【C】に当てはまる国名を以下の語群Ⅰから選び記号で答えなさい。

【語群Ⅰ】		
ア.スウェーデン	イ.フィンランド	ウ.中国
エ.日本	オ.ルーマニア	カ.アメリカ

問2 【D】から【G】に当てはまる職業を以下の語群Ⅱから選び記号で答えなさい。

【語群Ⅱ】		
ア.エンジニア	イ.開発技術者	ウ.農林水産業
エ.経営者	オ.宗教家	カ.デザイナー
キ.音楽家	ク.小売・卸売店主	

問3 本文の内容を200字程度で要約しなさい。

問4 どのような政策を実施すれば日本の格差を改善することができるか、自分の考えを述べなさい（200字程度）。以下の語群Ⅲの中からキーワードを一つ以上用いよ。必ずしも全て使う必要はない。

【語群Ⅲ】		
世襲	所得格差	教育